

## 子供のためのカスタネット奏法研究

— 音色の組み合わせに着目して —

### A study of the castanet method for children

— focused on the combination of timbre —

山 本 晶 子

YAMAMOTO Akiko

キーワード：カスタネット，リズム，音色，奏法，子供

Keywords: Castanets, Rhythm, Sound, Playing style, Children

現在の小学校音楽科教育において用いられているカスタネットは、戦後、簡易楽器の一つとして考案されたものである。その使われ方は大きく3つに分けて示され、それらは拍子とリズムを学習するための役割を果たしているが、楽器の音色と関連づけて打楽器としての魅力を伝えるには至っていないと言っても過言ではない。

本研究ではカスタネットの奏法と音色との関連性を考察したうえで、児童が身体の動きを通して実感を伴いながら自主的に音色を作っていくという音楽の学習につなげられるような奏法を体系的に示し、豊かな表現の可能性について論じた。

#### はじめに

現在、小学校等で使用されている教育用カスタネットは、昭和22年(1947)に上田友亀(1896-1994)によって簡易楽器の一つ「ハンドカスタ」として考案されたものである。上田は、それまで歌唱中心であった小学校音楽科の授業に器楽教育を行う必要性を唱えていた。ハンドカスタは、「昭和25年に現在の群馬県利根郡みなかみ町で創業したプラス白桜社が製造を始め、日本の教育現場で使われている木製カスタネットのほぼすべてはこの工場で作られ」<sup>1</sup>、以来急速に普及して、間もなく子ども1人が1つずつカスタネットを持つようになった。のちにハンドカスタは「カスタネット」と名称が変化したものの、考案から約70年経った現在においても、ほとんどその形は変わっていない。

戦後からこれまでの小学校の音楽教科書や指導書では、カスタネットの使われ方が大きく3つに分けて示されている。それは、①拍に合わせて打つ「拍子打ち」、②旋律のリズムと同じリズムで打つ「リズム打ち」、そして、③合奏において、主に強拍を担当する大太鼓やタンバリンなどの組み合わせで弱拍を打つ「リズム伴奏」というものである。その際、カスタネットを打つ手の部位は掌もしくは指先であり、休符の際はその手を裏返す動作が行われることが多い。

<sup>1</sup> 小向愛『赤谷プロジェクトにおける地域材の活用の取組～カスタネットづくりの取組～』関東森林管理局 2016 pp.76-79

これまでのカスタネットの使われ方は、拍子とリズムを学習するための道具としての役割を果たしているが、楽器の音色と関連づけて打楽器としての魅力を伝えるには至っていないと言っても過言ではない。本稿では、「音色の組み合わせ」に着目して、教育用カスタネットの奏法を体系的に示し、スペイン舞踊等に用いられるカスタネットのような身体の動きを伴った豊かな表現の可能性を提案したい。

## 1 教育用カスタネットの歴史

現在、日本の学校でカスタネットと称されているものは、古くからスペインを主とした欧米で使われている楽器とは異なるものである。スペイン舞踊のフラメンコで用いられている本来のカスタネットは、2枚の木片が紐で繋ぎ合わされていて、それを両手の親指に吊りし、残りの四本の指で打ち鳴らすもので、奏法が難しい上に長期の訓練が必要である。そこで、昭和初期に師範学校教師であり、舞踊家でもあった千葉躬治（1903-1995）は、子どもが簡単に扱えるように2枚の木片を蝶番で固定させた楽器「ミハルス」を考案し、運動や踊りの動きに合わせるリズム楽器、舞踊楽器として用いた。当時、小学校訓導であった上田友亀がそれを改良し、2枚の木片をゴム紐で結ぶことで自然に開き、上から打つだけで演奏でき、片手でも細かいリズムが奏でられるように工夫した「ハンドカスタ」を考案し、戦後音楽教育の普及とともに全国に広まっていった。

上田は、昭和10年（1935）7月、児童に楽器を使用させる唱歌教授の研究発表をした際、初めて「簡易楽器」という言葉を使い、「楽器こそは、国民学校の音楽をして児童の生活化し、生気を興へ、効果を的確ならしめるに必需の武器であると言つても過言で無い」<sup>2</sup>と器楽指導の重要性を説いた。そして、簡易楽器の条件を「児童全員が一斉に使う事ができ、安価で音量も大きすぎず、堅牢であり、衛生的にも無害なもの、そして、音色が明快であること」<sup>3</sup>と述べている。

その後、ハンドカスタは教育用楽器として広く普及することになるが、昭和22年（1947）に文部省が初めて学習指導要領の試案を作るにあたり、ハンドカスタが登録商標になっていたために、同種の木質打楽器であるカスタネットという言葉を使わざるをえなかったことから、本来のカスタネットとは奏法の違う楽器であるにもかかわらず、同じ名称を用いて現在に至っている。

## 2 カスタネットの種類

カスタネットには、その多様な奏法と作曲家の要求などにより、以下のような様々な形や材質のものがある。

<sup>2</sup> 上田友亀『ハンドカスタ 創案者の訴え』教育音楽 34（3）（387）小学版 音楽之友社1979 pp.90-91






<sup>3</sup> ibid.

<p>(1) スパニッシュ・カスタネット (写真1)</p> <p>フラメンコなどのスペイン民謡で用いるカスタネットで、本来「カスタネット」といえばこの楽器のことを指す。2枚を1組として2組1対で用いられる。左右それぞれ音高の異なる組み合せによって用いられ、高い方を「hembra (女性)」, 低い方を「macho (男性)」と呼び、8cm くらいの帆立貝のような形をした小木片の端に穴をあけ、くぼんだ部分を向い合せにして紐を通してある。材質は栗、ローズウッド、ザクロ、黒檀などの堅い木やベークライト、合成樹脂、圧縮布等が用いられる。演奏者は紐を親指にかけ、手を握るようにし、指を用いて演奏する。</p>	 <p>写真1 スパニッシュ・カスタネット</p>
<p>(2) 柄付きカスタネット (フラッパー・カスタネット) (写真2)</p> <p>小型のカスタネットに柄をつけて、片手で演奏できるようにしたもので、奏者は柄をもって奏する。膝や腿などを使った演奏でスパニッシュ・カスタネットの音色を出すことができる。また、人差し指だけを伸ばして握り、人差し指でカスタネットを上から押さえて開きを調整しながら演奏することで音量を調整することもできる。</p>	 <p>写真2 フラッパー・カスタネット</p>
<p>(3) 柄付きダブル・カスタネット (写真3)</p> <p>カスタネットに板のついた平らな板を挟んだもので、振るだけで連続したトレモロのような奏法ができる。音量のコントロールが容易で、長時間のトレモロやクレッシェンドができる。逆に、単音を出す事は難しい。</p>	 <p>写真3 柄付き ダブル・カスタネット</p>
<p>(4) テーブル・カスタネット (写真4)</p> <p>2組のカスタネットを台に取り付けたものである。ゴム紐や金属のスプリングで開いた状態を保ち、楽器を手を持つ必要がないため、マレットで叩くことが可能である。また、両手使えるので、細かいリズムやマルチ・パーカッションでの演奏などに適している。</p>	 <p>写真4 テーブル・カスタネット</p>
<p>(5) 教育用カスタネット (ハンドカスタ) (写真5)</p> <p>日本の幼児・児童の音楽教育現場でもっとも多く使われている楽器で、ゴム紐の弾力を利用し、その開閉によって音を出す。材料には、当初、音の良さからサクラを使っていたが、日本全国の学校で使用するようになり、材料の入手が追いつかず、手に入れやすい木材をもとめて、カエデ、そしてブナへと変遷し、現在ではプラスチックでも作られている。エナメルで赤と青に着色してあるものが多い。木の固さや材質等によって音色が異なる。単音をはっきりと演奏するのに適しており、左手の人差し指あるいは中指にゴム紐の輪を通して装着し、右手の指先や掌等で叩いて音を出す。</p>	 <p>写真5 教育用 カスタネット</p>

### 3 先行研究にみられるカスタネットの奏法



ハンドカスタが考案された当時には、様々な奏法が記された指導書が出版されていた。しかし、昭和 54 年 (1979) に創案者の上田が「ハンドカスタをいろいろ弄んでみてもらいたい。持ち方、打ち方、使い方について、こうでなければならぬと言う規定はない。自由に遊んで楽しんでいる間に何かが発見されると思う」<sup>4</sup>と訴えているように、現在の音楽の教科書ではそれらに触れられることは少なく、子供たちが奏法や音色を自由に追求するには至っていない。

たとえば、昭和 27 年 (1952) に出版された器楽合奏教本である「ハンドカスタのゆうぎ」<sup>5</sup>には、以下の 7 種類の奏法が記されている（かな表記は原著のまま）が、実際の教育現場ではこれらの奏法を用いられることはほとんどなく、小学校の音楽の教科書や指導書を見るかぎりでは、カスタネットはリズムや拍を刻むだけの道具となっているのが現状である。

<p>(1) ひらうち・・・おもてうち ハンドカスタをおもてもちにして、右手の人さしゆび、中ゆび、くすりゆびで中央を軽くたたきます。</p>	
<p>(2) こぶしうち・・・おもてうち ハンドカスタをおもてもちにして、右手を軽くにぎり、（こぶしにして）中央をたたきます。</p>	
<p>(3) くぼみうち・・・おもてうち ハンドカスタをおもてうちにして、右手の人さしゆびか中ゆびを中央のくぼみにつけ、はなさないようにしてうちます。早くうつ時などには軽くかわいい音がでます。</p>	
<p>(4) アルペジオうち・・・おもてうち ハンドカスタをおもてうちにして、右手のこゆび、くすりゆび、中ゆび、人さしゆびのじゅんじょでハンドカスタのふちをはやくうつのをいいます。丁度ピアノのアルペジオをひくときのようにうちたいものであります。これは急にはできませんからだんだんに練習します。</p>	
<p>(5) ことりなきうち・・・うらもち ハンドカスタを右手人さしゆびのうらもちにする。このときおやゆびは下のくぼみにあてるように持ちます。丁度小鳥が口を開いているようなようすにみえます。</p>	

<sup>4</sup> 上田友亀『ハンドカスタ 創案者の訴え』教育音楽 34 (3) (387) 小学版 音楽之友社 1979 pp.90-91

<sup>5</sup> 戸倉ハル・小林つや江『ハンドカスタのゆうぎ』不昧堂書店 1952 pp.3-5

<p>(6) つづみうち・・・うらもち          ハンドカスタを、うらもちにして、左手のてのひらに、うちつけます。丁度つづみをうつようなきもちでうってください。</p>	
<p>(7) にぎり打ち          ハンドカスタを、うらもちにして、軽くにぎります。そしてにぎりながら音をだします。</p>	


(Table 1: 戸倉ハル・小林つや江『ハンドカスタのゆうぎ』)

#### 4 カスタネット奏法の新たな提案

カスタネットが簡易的な楽器としてのみならず、小太鼓や木琴といった他の打楽器のように様々な音色を表現し、音量を調節できる多様な可能性をもった楽器として活用するために、筆者の打楽器奏者としての経験をもとに、奏法を音色の組み合わせやリズムパターンと関連づけて以下のように整理した。

<打ち方の種類>

<p>1. フィンガーチップ (指先) ⇒ <math>\boxed{m \rightarrow i}</math> <math>\boxed{r \rightarrow m \rightarrow i}</math>          1本の指先で打つ。薬指で打つ時は<math>\boxed{r}</math>、中指で打つ時は<math>\boxed{m}</math>、人差し指で打つ時は<math>\boxed{i}</math>と表記する。小さな音を演奏するときには、図のように、中心部よりも外側を開きを小さくするようにしながら演奏するとやりやすい。大きな音を出すときには適していないが、それぞれの指を交互に使うと、細かいリズムを刻むことができる。</p>	
	<p>譜例 1</p> 
	<p>譜例 1-2</p> 
<p>2. ライト (右手による3本の指) ⇒ <math>\boxed{R}</math>          右手の複数の指先で中心部分あたりを打つ。基本の打ち方。一定の音量でリズムを刻みやすい。大きく打つときには打つ前の予動時にカスタネットから距離をとり、小さく鳴らすときには指先をカスタネットにつけておくことによって、音量をコントロールすることができる。</p>	

	<p>譜例 2</p> 
<p>3. レフト（左手打ち）⇒ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">L</span></p> <p>左手の親指以外の指を折って中心部あたりを握るようにして打つ。太鼓を叩くときの右手と左手の役割のように、右手が打つ合間に左手で裏拍を打つことによって、リズムを細かく刻むことができる。右手が打つときにはすでに楽器から指が離れている必要がある。右手で打つ時よりも、音量がやや小さくなることで音色の変化を表現することができる。</p>	
	<p>譜例 3</p> 
<p>4. フィンガーパッド（指の腹）⇒ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">F</span></p> <p>右手の人差し指、中指、薬指のそろえた3本の指の腹で打つ。小さい音を奏でるのは難しいが、音量が増すとともに、重みも加わった音色になる。アクセントをつけたいときなどに効果的。打った後、手を瞬時に離すか、離さずに置いておくかによって音色に違いを出せる。</p>	
	<p>譜例 4</p> 
<p>5. クラップ（手打ち）⇒ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">C</span></p> <p>掌で打つ。手拍子と同じやり方で演奏することができる。指の開き方、または、掌で包み込むことによって、こもった音色から華やかな音まで幅広く奏でられる。細かい音符を刻むことは難しい。記譜上では、掌同士を合わせるときを○、手で卵を握るように合わせるときを+とする。</p>	
	<p>譜例 5</p> 

6. パンチ（こぶし打ち）⇒ **[P]**

握りこぶしで打つ。細かい音符を刻むことは難しいが、深く重いしっかりとした音色になる。肩たたきと同じような動き。



譜例 6

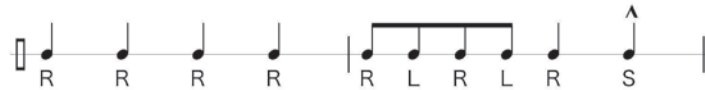


7. スマッシュ（掌で打ちはらい）⇒ **[S]**

右手の指の腹もしくは掌で左手の肩の方向に打ちはらう。テニスのスイングのようなイメージで打つ。大きな音量で張りのある音色を奏でることができる。手だけでなく、腕の動きを伴うので視覚的效果も加わる。



譜例 7



8. バックスマッシュ（手の甲で打ちはらい）⇒ **[B]**

右手の手の甲で手前から向こうに向かって、カスタネットを打ちはらう。スマッシュと組み合わせることで連続したリズムを刻むことができ、視覚的效果もより豊かになる。



譜例 8





## 5 小学生のためのエチュード

### 1) 易しいリズムでのいろいろな打ち方

The piano part is written on a grand staff with two staves. The right hand (treble clef) plays a melody of quarter notes: R, R, R, L, L, L, rmi, rmi, L, L, L. The left hand (bass clef) plays a bass line of quarter notes: i, i, i, i, i, i, F, F, F, F, F, F, F, F. The piece begins with a piano (p) dynamic and ends with a forte (f) dynamic.

## 2) 音量の違いを表現する打ち方

### 3) 音色の組み合わせを表現する打ち方

*mf* R R L R L | R R L R L | R L R L R L R L | R R R  
*p* i m i m i m i m | i i i | *f* R L R L R L R L | R R R

#### 4) 音色の組み合わせを強調する打ち方

rmi L L L | rmi L L L | rmi L rmi L | P C P C P C

R R L R R L R L | R R L R R L R L | S B S B | R L R L R S

### 5) 力強い音色と軽い音色の組み合わせ

The musical score for 'The Rose Tree' is presented in two systems. The first system consists of two staves. The upper staff is for the vocal line, starting with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). It contains four measures of music with lyrics 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', and 'The Rose Tree'. The notes are: G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); and G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter). The lower staff is for the piano accompaniment, starting with a bass clef. It contains four measures of music with lyrics 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', and 'The Rose Tree'. The notes are: F3 (half), G3 (half); F3 (half), G3 (half); F3 (half), G3 (half); and F3 (half), G3 (half). The second system also consists of two staves. The upper staff is for the vocal line, starting with a treble clef and a key signature of one flat. It contains four measures of music with lyrics 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', and 'The Rose Tree'. The notes are: G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter); and G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), G4 (quarter). The lower staff is for the piano accompaniment, starting with a bass clef. It contains four measures of music with lyrics 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', 'The Rose Tree', and 'The Rose Tree'. The notes are: F3 (half), G3 (half); F3 (half), G3 (half); F3 (half), G3 (half); and F3 (half), G3 (half). The score includes dynamic markings: *f* (forte) at the beginning of the first system, *mp* (mezzo-piano) at the beginning of the second system, and *f* (forte) at the beginning of the third system. The score ends with a double bar line and repeat dots.



## 6) 速いリズムとアクセントの組み合わせのリズム



## 6 課題と今後の展望

カスタネットは、打ち始める位置、打つ速さ、打った後の手の逃がし方、打つ時の手の形等、演奏する時の手の動きを変えることで、たくさんの種類の音色をつくることができる。しかし、現在の教科書にはそれらの打ち方は示されておらず、身体の動きを通して実感を伴いながら自主的に音色をつくっていくという音楽の学習につながっていないように思われる。奏法と音色とは大きな関連性があり、子供たちが表現したい音色を出すための奏法を考える手がかりになるメソッドが必要ではないだろうか。様々な奏法の工夫が豊かな音楽表現にもつながる。リズムは曲想とも関連があり、リズムによって音楽のもつテンポ感が変化し、使う指や角度がそれに伴って変化する。むしろ、リズムそのものが音色や曲想を形づくっていると言っても過言ではない。

思いどおりにリズムと音色を組み合わせ、身体の動きを伴って表現できることがカスタネットの真骨頂である。鑑賞教材を使って、身体を動かしながら、音楽の特徴を実感を伴って理解し、音楽の表情を生み出す源のリズムを体感することによって、自分自身で音色をつくり出したり、表現したい音色とリズムを組み合わせたりすることができる。これからも、打楽器を用いた音楽教材のあり方を単に拍子やリズムのパターンを教えるためだけではなく、子供たちが自らの感性を働かせて楽器の音色を発見し、主体的に音楽表現するためのものとして活用できるよう、さらに研究を進めていきたい。

最後に、この研究をより実際的なものにするためにご協力いただいた、静岡県内の小学校の先生方や児童生徒の皆様にご心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 青木由之介「リズム楽器の奏しかた」『目と耳による音楽の学習第1巻（器楽編）』音楽之友社 1961
- 網代景介・岡田知之『打楽器事典』音楽之友社 1981
- 網代景介・岡田知之『新版 打楽器事典』音楽之友社 1994
- 今井誉次郎、宮坂哲文 監修『私たちの学級経営 小学1年』明治図書 1957
- 上田友亀『国民学校 器楽指導の研究』共益商社書店 1943
- 上田友亀『決戦増産の歌』五月号 音楽之友 1943
- 上田友亀『音楽教育の事ども』十月号 音楽之友 1943
- 上田友亀『新音楽教育業書 第七番 簡易楽器の教え方』音楽之友社 1948
- 上田友亀『小学校の音楽指導 上 第1.2学年』日本教育図書株式会社 1948
- 上田友亀『簡易楽器の作り方と指導法Ⅱ（木琴、鈴、カスタネット等打楽器）』1950

- 上田友亀『ハンドカスタ 創案者の訴え』教育音楽 34 (3) (387) 小学版 音楽之友社 1979
- 鍵田真由美, 佐藤浩希 監修, 小林みずき『魅せる! フラメンコ・アイテム: カスタネットからマントンまで』パセオ 2002
- 門脇早聰子『小学校学習指導要領「音楽」「体育」のリズムに関する記述の変遷—昭和 22 年から昭和 52 年を中心に—』音楽学習学会紀要 音楽学習研究 第 11 巻 2015
- 門脇早聰子『日本の初等科音楽教育における楽器「ミハルス」の意義と役割』音楽教育史学会 紀要 2015
- 門脇早聰子『ハンドカスタの使用法とその多様性』聖徳大学大学院音楽文化研究科 聖徳大学音楽学部 音楽文化研究会 音楽文化研究 第 14 号 2015
- 門脇早聰子『初等科音楽における簡易楽器導入の歴史的背景—「ハンドカスタ」を考察した上田友亀に着目して—』日本音楽表現学会「音楽表現学 Vol.12」研究報告 2018
- 門脇早聰子『日本のリズム教育におけるカスタネット類の役割』聖徳大学大学院音楽文化研究科 博士学位論文 2017
- 黒沢隆朝『世界楽器大事典』雄山閣 2005
- 小島賢八郎『楽隊用吹奏楽器 教本』京都十字屋楽器部発行 1914
- 小向愛『赤谷プロジェクトにおける地域材の活用の取組〜カスタネットづくりの取組〜』関東 森林管理局 2016
- 小森宗太郎『打楽器教則本』共益商社書店 1933
- 齋藤實『鈴・カスタネットでも主役になれる! やさしくたのしい器楽合奏曲集』民衆社 2009
- 谷村宏子・門脇早聰子『大正期から昭和初期における遊戯・リズム活動—戸倉ハル・高森ふじを中心に—』関西学院大学教育学会 教育学論究 2017 第 9 号 2 2017
- 塚田靖, 瀬上養之助『打楽器スーパーガイド カスタネットからラテンパーカッションまで』戸倉ハル・小林つや江『ハンドカスタのゆうぎ』不昧堂書店 1952
- 齋藤次郎『小学校音楽教育業書 7 低学年の音楽指導』明治図書 1962
- 細田淳子『表現活動におけるミハルスの役割』1997
- 細田淳子『木製打楽器ミハルスの音に対する幼児の嗜好』東京家政大学研究紀要 第 40 集 1999
- 森脇中『リズム楽器の教え方』白眉音楽出版 1956
- 山本栄『国民学校教師の為の簡易楽器指導の実際』共益商社書店 1943